

日本ロレンス協会第 52 回大会プログラム

(オンライン Zoom 開催)

◎日 時： 2021 年 6 月 19 日 (土)、6 月 20 日 (日)

◎形 態： Zoom を使用してオンラインでのライブ開催

(会員の皆様には、当日までにメールにて Zoom の ID をお知らせいたします。)

事務局連絡先：立命館大学法学部 石原浩澄研究室

TEL: 075-466-3204 (石原研究室)

Email: hit00347@law.ritsumeai.ac.jp

【役員会】

日 時： 6 月 19 日 (土) 10:30~12:30

形 態： Zoom を使用してオンラインでのライブ開催

第 1 日目： 6 月 19 日 (土曜日)

◎開会の辞： 会長 田部井 世志子 (北九州市立大学教授) (13:00~)

◎事務局からの連絡：事務局長 石原 浩澄 (立命館大学教授)

研究発表 (13:10~13:50)

司会 糸多 郁子 (桜美林大学教授)

Lady Chatterley's Lover における「純粹」の探求

大江 公樹 (早稲田大学大学院生)

———休憩 (10 分) ———

シンポジウム (14:00~17:00)

アフター・ロレンス——「共通文化」にむけて

司会・講師 井出 達郎 (東北学院大学准教授)

身体／都市の有機体化への抗い

——アフター・ロレンスの一例としてのヘンリー・ミラー『北回帰線』

講師 井出 達郎 (東北学院大学准教授)

A. L.ロイドの *Come All Ye Bold Miners* (1952) における炭坑歌と共通文化

講師 廣瀬 絵美 (日本女子大学大学院生)

〈余地=あそび〉のテクスチュアリティから〈共〉という富へ

講師 木下 誠 (成城大学教授)

※コメンテーター 浅井 雅志 (京都橘大学名誉教授)

◎ 総会 (17:05~17:35)

(引き続き Zoom で行います。)

第2日目： 6月20日 (日曜日)

ワークショップ (10:00~12:30)

今、ロレンスにどうアプローチできるか

司会・講師 中林 正身 (相模女子大学教授)

講師 岩井 学 (甲南大学教授)

講師 高村 峰生 (関西学院大学教授)

◎閉会の辞： 副会長 石原 浩澄 (立命館大学教授)

研究発表

*Lady Chatterley's Lover*における「純粹」の探求

大江 公樹（早稲田大学大学院生）

*Lady Chatterley's Lover*は、主人公コニーが、森番メラーズとの間にエゴイズムを超えた愛を実らせてゆく物語である。本作では、コニーの恋愛を描写する際、「純粹な (pure)」あるいは「純粹 (purity)」といふ言葉が度々登場する。例へば物語の序盤に、コニーと肉体的な関係を持つ俗物劇作家ミケイリスが、ラグビー邸を訪れて自作の芝居的一幕を朗読して大成功を収める場面がある。この時コニーはミケイリスの表情に「不純の極致にあるであらう純粹 (an extreme, perhaps, of impurity that is pure)」を見出す。また物語の中盤、コニーはメラーズとの愛を深めてゆく中で、「虚偽の恥ぢらひを焼き尽くして、肉体といふ重い鉍石を溶解して純化すること (to burn out false shames and smelt out the heaviest ore of the body into purity)」が必要であると感じる。片や単なる肉体関係、片やそれに留まらない互ひへの優しさを含む関係、それぞれの描写に「純粹」に関はる表現が用ゐられてゐることには、「純粹」を問ひ追求してゆくといふ、ロレンスの姿勢が表れてゐるのではないか。本発表では、*Lady Chatterley's Lover*において「純粹」といふ概念がどのような役割を果たしてゐるかを検討して、宗教的文脈を意識しつつロレンスの思想の方向性を明らかにする。

シンポジウム

アフター・ロレンス——「共通文化」にむけて

司会 井出 達郎（東北学院大学准教授）

「ロレンスの重要性はどこにあるのか？」——木下誠の『モダンムーヴメントのD・H・ロレンス——デザインの20世紀／帝国空間／共有するアート』は、ロレンス研究におけるこの根源的な問いに対し、「モダンムーヴメント」という文脈を導入することで、それは現

実の社会に変化をもたらす考えと実践の探究にある、という答えを鮮烈に提示した。もともと従来のモダニズム研究から読まれるロレンスには、近代社会が抱えていた問題を描くことはあるものの、そこから展開されるのは形而上学的な問題だけであり、最終的に提示されるのは、現実の社会から切り離された個的な再生にすぎない、とみなされる面があった。この「モダニズムのロレンス」に対し、木下は、ロレンスがモダンムーヴメントと呼ばれる建築の分野での運動の最中にいたこと、特に、アートの共有を通して親密なコミュニティを作り出すことを目指したウィリアムス・モリスの系譜上にあることを明らかにしつつ、切り離された個的な再生とは逆に、人々の分断に抗い続ける革命へのプロセスを描き続けていた新たなロレンス像を立ち上げる。この「モダンムーヴメントのD・H・ロレンス」について、本書を評した河野真太郎は、それがレイモンド・ウィリアムズの「共通文化」という概念にそのまま結びつく、と指摘している。共通文化とは、文化を「ふつうのもの」と捉えることで、特権的な集団による占有に抗い、「社会の成員の参加によって作り出され、社会に変化をもたらしもする」(河野)プロセスにほかならないからだ。

では、「モダンムーヴメントのD・H・ロレンス」は、実際にウィリアムズのいう「共通文化」をもたらしたのか。この問いは、共通文化が文化それ自体の意味を不断に問い直すプロセスである以上、ロレンス本人の作品のみならず、「ロレンス以後」の影響についても考える必要があるだろう。今回のシンポジウムは、木下の著作を出発点に、そのような共通文化へと向かっていった「アフター・ロレンス」を考えようとするものである。まず木下が著作の概要およびその共通文化との結びつきを説明したうえで、三人の講師がそれぞれのアフター・ロレンスの具体例を提示する。その際、従来の「モダニズムのロレンス」との対照を明確にするため、浅井雅志前会長にコメンテーターという立場で参加していただく。

なお今回のシンポジウムでは、「共通文化」をキーワードにするにあたり、ウィリアムズの論文「文化とはふつうのもの」を共通テキストにし、また以下の文献を参考テキストとする。

(Raymond Williams)

「文化とはふつうのもの」 “Culture Is Ordinary” (1958)

「このアクチュアルな成長」 “This Actual Growth” (1961)

「共通文化の理念」 “The Idea of a Common Culture” (1968)

(川端康雄編訳『共通文化にむけて——文化研究 I』(みすず書房)に収録)

Culture and Society (1958) (“Lawrence,” “R. H. Tawney,” “Conclusion,” etc.)

The Long Revolution (1961)

The English Novel from Dickens to Lawrence (1970) (“Lawrence,” “Conclusion”)

Keywords: A Vocabulary of Culture and Society (1976) (“common,” “ordinary,” etc.)

(その他)

テリー・イーグルトン『文化とは何か』(2000)

河野真太郎『〈田舎と都会〉の系譜学——20世紀イギリスと「文化」の地図』(2013)

山田雄三『ニューレフトと呼ばれたモダニストたち——英語圏モダニズムの政治と文学』(2013)

大貫隆史『「わたしのソーシャリズム」へ——20世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ』(2016)

身体／都市の有機体化への抗い

——アフター・ロレンスの一例としてのヘンリー・ミラー『北回帰線』

講師 井出 達郎(東北学院大学准教授)

木下誠の著作の第 II 部「帝国空間の越境のモダンムーヴメント」が国境を超えた運動としてのモダンムーヴメントを論じていること、そして、今回のシンポジウムのキーワードである「共通文化」が特権的な集団が占有するものとしての文化に抗うことを踏まえれば、アフター・ロレンスという主題を考えるにあたり、「英文学」という境界を超えたロレンスの影響もまた視野に入れる必要があるだろう。本発表は、「モダンムーヴメントのロレンス」が共有文化の問いを国境を超えて共有する例として、アメリカ人作家ヘンリー・ミラー『北回帰線』(1934)を論じる。

ヘンリー・ミラーの『北回帰線』は、ロレンスと共通文化をめぐる問いを、身体と都市の有機化への抗い、というべき試みにおいて展開する。ミラーが1930年代にパリにいたときに書かれた『北回帰線』は、出版条件として出版社からロレンスの研究書を書くことを要請され、また下書きにはロレンスへの言及があるなど、ロレンスとの直接的な関連を見ることは難しくない。だがそのような直接的な影響関係に加えて重要なのは、従来の「モダニズムのロレンス」と同様、社会から逃避した個的な再生のみを読み取られがちなこの作品が、実は現実の社会を変化させる面を孕んでいること、それがロレンスの共通文化をめぐる問いと不可分であることにこそある。一見するとミラーを思わせる語り手がパリを放浪するだけのように思えるこの作品は、その語り手の放浪を通し、身体と都市が「生産」に基づいて一様に決定されていく近代の生のあり方、すなわち、都市と身体が有機体化(organization)されていく生のあり方を浮き彫りにしていく。そして同時に、その有機化への抗いと、その抗いの向こう側で出会われる他者とのつながりこそを力強く肯定していく。本発表は、特に『チャタレー夫人の恋人』を取り上げながら、「モダンムーヴメントロレンス」もまたこの生の有機体化への問いを共有していることを確認したうえで、ミラーの作品がその正確な系譜上にあることを明らかにする。

A. L.ロイドの *Come All Ye Bold Miners* (1952) における炭坑歌と共通文化

講師 廣瀬 絵美 (日本女子大学大学院生)

A. L.ロイド (Albert Lancaster Lloyd, 1908-82) は、1950年から60年代にかけて展開されたイギリスのフォークリヴァイヴァル運動において主導的な役割を果たした音楽民俗学者・フォークシンガーである。

ロイドは、LPレコードやラジオ、フォーククラブを通して、主にイギリス国内の伝統歌の保存と普及に努めてきた。中でも精力を注いだ作業の一つには炭坑歌の収集活動がある。1951年に開催されたイギリス祭における炭坑産業の貢献の一環として、ロイドは炭坑歌の収集活動を任されることになった。その結果として、1952年に *Come All Ye Bold Miners* という炭坑歌の歌集が出版される。同書には、炭鉱労働者の労働歌や恋愛、余暇、鉱山災害、ストライキを扱った炭坑歌が収められており、フォークリヴァイヴァルの中で、新たなレパートリーとして歌われるようになる。

こうした一連の流れから、ロイドは炭坑歌が表出する労働歌の連帯感や闘いの精神に、レイモンド・ウィリアムズが指摘していた「共通文化」の可能性を見出しており、人びとが炭坑歌を享受できることを目指していたと考えられる。本発表では、ロイドの炭坑歌収集における一連の活動や思想、歌を検証することで、いかにロイドが炭坑歌を共通文化として継承しようとしたのかを考察し、ロレンス以後の重要な文化運動として位置付けられるかを示したい。

〈余地=あそび〉のテクスチュアリティから〈共〉という富へ

講師 木下 誠 (成城大学教授)

拙著『モダンムーヴメントのD・H・ロレンス——デザインの20世紀／帝国空間／共有するアート』(2019年)は、レイモンド・ウィリアムズのロレンス評を踏まえながら、「モダンムーヴメント」が目指す「共通文化」の一側面を「共有するアート」と呼んだ。このいささか据わりの悪い言いまわしの「共有するアート」は、「～が(たとえば、人びとが)共有する技術／芸術」と「～を(たとえば、社会的資源を)共有する技術／芸術」という意味を兼ね合わせていた。

本発表では共通文化としてのロレンスのテキストの可能性を、反復を多用する彼の文体を足がかりに探してみたい。まずは、デイヴィッド・トロッターが「否認の顕現(negative epiphany)」と呼んだ『息子と恋人』からの一節を、(ポスト)モダンデザインの観点から読み直す。わたしが依拠するのは、モダニズム建築家のアドルフ・ロースによるアール・ヌ

ーヴォー批判の「装飾と犯罪」(1908年)を換骨奪胎した、ポストモダン美術批評家のハル・フォスターによる「デザインと犯罪」(2002年)である。フォスターは、多国籍企業のブランド戦略に典型的にみられるグローバル資本主義の展開を「トータル・デザインの世界」あるいは「デザインのインフレーション」として批判し、抵抗としてズレを生じさせる「余地=あそび(*spielraum*, *running-room*)」の重要性を指摘した。本発表では、ロレンスの文体が生み出す意味作用の揺れを、そうした〈余地=あそび〉のテクスチュアリティと捉えてみる。その目指すところは、私的であれ公的であれ「所有」への呪縛を乗り越えようとするロレンスの苦闘のプロセスを「共通文化」として描き出し、さらにその延長線上にあるものとして、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートがいわゆる〈帝国〉三部作の完結篇にあたる『コモンウェルス——〈帝国〉を超える革命論』(2009年)で構想した「〈共〉という富(*commonwealth*)」の収奪を目論むグローバルな力との闘争——「すでにその内部に未来を包含した「過剰な」現在」に息づく「革命」——を理解することにある。

ワークショップ

今、ロレンスにどうアプローチできるか

このテーマに則って、高知県立大学の学生の皆さんと一緒にロレンスに近づいてみようと思います。ロレンスという人物またはロレンスの文学テキストにどのような近づき方があるのかを講師が紹介し、そこからロレンスまたはロレンス文学を「読解」することを経験しながら楽しんでもらいたいと思います。

司会・講師 中林 正身 (相模女子大学教授)

『チャタレー夫人の恋人』という小説があります。この小説がかつてはどのように読まれ受容されていたのかを知り、そして今度は21世紀を生きている私たちはどのようにそれ

を読むのかを試してみましょう。文学作品のなかの一部分ではありますが、私たちのそれぞれの経験を背景とした、その箇所を精読と解釈の生産に取り組んでみたいですね。

講師 岩井 学（甲南大学教授）

D・H・ロレンスの『虹』が書かれたのは今から約100年前ですが、当時のイギリスはどのような社会だったのでしょうか？ 現代との共通点は？ そしてロレンスは当時の社会をどのように描いているのでしょうか？ 実は100年前のイギリスの社会は今の我々の社会と似た面を持っています。『虹』から一つのパッセージを読んで、私たちの生き方を振り返ってみましょう。

講師 高村 峰生（関西学院大学教授）

ロレンスは動物、鳥、植物についての詩を多く書きました。今回は、「ハミングバード」という詩を読み、そこに何がどのように表現されているか、あなたのイメージとどのように異なるかなど、自由に考え、話しあってみたいと思います。